

『カンド・ニンティク』研究(3)

—*dBang khrid nor bu sgron gsal* 和訳(2)—

安 田 章 紀

1. 序

チベット仏教ニンマ派の特異な思想として知られる「ゾクチェン」(rDzogs chen、大究竟)については近年、研究の進展が著しいが、まだ未解明の部分を多く残している。筆者は本誌の前々号および前号において¹、ゾクチェンの有力な伝統の1つである「ニンティク」(sNying thig、心髄)を取り上げ、初期ニンティクの研究上、重要な文献群である『カンド・ニンティク』(*mKha' 'gro snying thig*、『ダーキニーの心髄』)について、基礎的な研究を行なった。とりわけ前号では、同文献群に収められている著作の1つ、*dBang khrid nor bu sgron gsal* (『灌頂の指南・宝石の灯明の輝き』)の一部分を試訳し、ニンティク、さらにはゾクチェンの灌頂儀礼に関する研究に先鞭をつけた。これを受けて本稿でも引き続き、同じ *dBang khrid nor bu sgron gsal* を取り上げ、同書の灌頂の式次第と、それを支えている思想について研究を進めることにしたい。

既に指摘したように²、インド後期密教において確立し、その後、チベットを含めて広く流布した「4灌頂」の体系、すなわち、①「瓶灌頂」(bum dbang)、②「秘密灌頂」(gsang dbang)、③「般若智慧灌頂」(shes rab ye shes dbang)、④「第4灌頂」あるいは「語灌頂」(dbang bzhi pa あるいは tshig dbang) という4つの灌頂からなる儀礼体系は、*dBang khrid nor bu sgron gsal* を含む『カンド・ニンティク』においても基本的にそのまま継承されていた。*dBang khrid nor bu sgron gsal* には1番目の「瓶灌頂」を除く3つの灌頂の式次第が記されているが、前号において2番目の灌頂である「秘密灌頂」について述べた部分を訳し終えているので、本稿では残りの3番目の「般若智慧灌頂」と4番目の「語灌頂」に当たる部分を訳出することにする。

¹ 安田[2008]、同[2009]を参照。

² 安田[2009: 99]を参照。

2. 概要

翻訳を掲げるに先立って、本稿で取り上げる2つの灌頂儀礼の概要を提示しておきたい。

まず、3番目の灌頂である「般若智慧灌頂」について述べている部分では、冒頭において、この灌頂儀礼の典拠として *Klong gsal nyi ma'i rgyud* (『大空間の輝きである太陽のタントラ』)³の一節が引用される。これは『カンド・ニンティク』が準拠する主要タントラ群の1つであり、同タントラからの引用文によって叙述を開始する仕方は、2番目の「秘密灌頂」と同様である⁴。この引用文では、「般若智慧灌頂」を行なうべき場所、時間帯として、「マンダラの西方」、「夜中」が指定されている。因みに「秘密灌頂」では、「マンダラの南方」、「黄昏時」とされていた⁵。この前提条件のもと、まず弟子がマンダラを献上し、庇護を請う。次いでラマは三昧耶を弟子に授けてやるが、三昧耶の趣旨は、女性を遠ざけることの厳禁である。続いて「秘密灌頂」においてと同様、ラマは弟子に覆面をかぶせ、自ら「金剛牝豚」(*rDo rje phag mo, Vajravārāhi*)⁶を観想し、弟子にも観想させる。観想が終わると弟子の覆面をほどいてやり、性的瑜伽のパートナーとして「秘密灌頂」に登場した女性である「印母」(*mudrā*)の女陰について、一切諸仏の「秘密にして深遠な実義」にほかならないと讃える。印母自身も、自らの女陰が最高の悉地の源泉である旨を弟子に対して述べる。その後、ラマは印母を弟子に委ねてから、弟子が印母と共同で行なうべき実践、すなわち性交を利用した瑜伽の具体的な段取りを指示する。それによると、弟子と印母はそれぞれ自らを「馬頭」(*rTa mgrin, Hayagrīva*)と「金剛牝豚」、その陰部を「金剛杵」と「蓮華」として観想しつつ性交を行なって、「楽」を生起させる。弟子は射精を押しとどめて楽を増幅させ続ける。その過程の果てに、あらゆる二元性が消失した「楽と空が不二である」状態を実現し、その境地において、究極の智慧である「俱生の智慧」(*lhan cig skyes pa'i ye shes, sahajajnyāna*)を把握するに至る、という。

以上のような実践の指示によって第3灌頂の式次第そのものは終了し、灌頂の結

³ 既に散逸したと考えられているこのニンマ派独自のタントラに関しては、安田[2009: 100, n. 14]、Achard[2002: 65, 74]を参照。

⁴ 安田[2009: 100]を参照。

⁵ 安田[2009: 101]を参照。

⁶ 「金剛牝豚」は『カンド・ニンティク』における最重要尊格である。安田[2009: 102]を参照。

果として、「意の障碍の浄化」や「第 10 地の菩薩と等しい幸福」、「不生なる法身」などが達成される。

次に 4 番目の灌頂である「語灌頂」の概要を説明する。「秘密灌頂」、「般若智慧灌頂」に関する記述と同様、冒頭に *Klong gsal nyi ma'i rgyud* の一節が引用されている。引用文によると、この灌頂は「マンダラの北方」において、「暁の日の出の時」に執行されなくてはならない。まず、弟子は例の如くラマに灌頂の授与を請願する。そして、尊格の群れの観想や供物の準備、供養・讃嘆、さらには尊格群の光への融解や種子への変容といった典型的な密教的観法が行なわれる。次にラマは、先行する 2 つの灌頂儀礼と同様、弟子に三昧耶を授けるが、この三昧耶は「守られ得ない三昧耶」(*bsrung du med pa'i dam tshig*) と呼ばれ、あらゆる存在が差異を失って平等である境地に弟子がとどまり続けることを義務付けている。続いてラマは加持を通して「智慧」(*ye shes*) を弟子に降臨させる。弟子は「智慧」が降りて来たその状態において、緊張を緩めつつリラックスする。弟子はその際、ゆったりとして力みのない、静謐で晴朗なありかたを体験するが、ラマは「そのありかたこそ法身にほかならない」と弟子に教える。

次にラマは弟子に向かって、心というものが空であり、不生である旨を告げる。さらに、色声香味触法、すなわち、目に見えるもの、耳に聞こえるもの、鼻に嗅がれるもの、舌で味わわれるもの、肌で触られるもの、心に思い浮かべられるもの、という 6 種類の対象はすべて現象として明らかに顕現しているものの、本質としては空にほかならない旨を具体例も交えつつ順次、詳説する。以上の教示によって第 4 灌頂の式次第そのものは終了し、灌頂の結果として、「身口意における把握作用という障碍の浄化」や「第 11 普光地」、「自ずと成立した 5 仏身」などが得られるという。

以上が今回訳出する 2 つの灌頂儀礼の梗概であるが、ここで簡単な考察を加えておく。まず、「般若智慧灌頂」については、先の第 2 灌頂ではラマが印母と交わり、その精液を弟子の口中に投じるという特徴的な過程が見られた。この儀礼では、さらに進んで、弟子自身が印母との性的瑜伽を実践するに至る。ほかに、女性を遠ざけることを禁ずる三昧耶の授与や、女性の陰部に対する教理的意味づけの宣告などが見られ、本灌頂の性的色彩は顕著なものとなっている。しかし、これらは本文献の「般若智慧灌頂」のみの特色ではない。そもそも、前稿で既に指摘した⁷ように、本文献における第 2 灌頂の式次第は、インドの後期密教文献に見られるそれと

⁷ 安田[2009: 99-100]を参照。

比べて大きな相違が認められない。同じことはこの第3灌頂についても言える⁸。すなわち、語彙や細かな手順などの点で小さな相違点は認められるものの、骨格としてはインド以来の「般若智慧灌頂」の式次第がそのまま踏襲されているのである。

次に4番目の「語灌頂」はその名称が示す通り、「語」、つまり師が弟子に告げる「言葉」が中心的な役割を担う灌頂であるが、先行する2つの灌頂儀礼と大いに趣きを異にしている。例えば三昧耶については、先立つ2つの灌頂で授けられるそれは、感覚的享樂の奨励や女性を遠ざけることの禁止など、具体性・身体性の濃厚な内容であった。一方、ここでは単に、万象が平等で取捨選択の存在しない究極的境地にとどまり続けるよう命じる、非常に抽象的かつ精神的な内容となっている。そして儀礼の核心部では、既に述べたように、ラマが心と、その心が捉える色、声、香、味、触、法という対象はすべて空であるという哲学的教説を順次、弟子に語り聞かせ、納得させていく。ここには、「秘密灌頂」および「般若智慧灌頂」にあればほど顕著だった性的要素はおろか、そもそも所作性・身体性さえ認められない。あるのは師から弟子への語りかけのみであり、まさに「言葉による灌頂」としての面目躍如たるものがある。

既に指摘されている⁹ように、インドにおいて既に第4灌頂を「真理の命題を言葉によって授ける次第」とする潮流が存在した。したがって、本文献の第4灌頂はこのようなインド以来の思潮の上に立脚して、作り上げられたものと考えてよいと思われる。このように、インドでの先例を基本的に踏襲しているのは、先の2つの灌頂と全く同様である。しかし、本文献における第4灌頂の式次第の一々を仔細に見れば、2番目および3番目の灌頂の場合とは異なり、現在までに知られているインド文献のそれ¹⁰と余りに隔たりが大きいことも事実である。したがって、本書の式次第の細目がどの程度までインドに遡るのか、あるいはインドにまで跡を辿ることができず、時代的に先立つ新訳派またはニンマ派文献からの影響の下に作成されたのであるか、あるいは本書の独創なのかを詳しく検討する必要がある。この問題の解決については、今後の研究に待つことにしたい。

⁸ インド文献における第3灌頂の具体例については桜井[1996: 185-207]、森[1999: 204]を参照。

⁹ 桜井[1996: 208-209, 240-241]を参照。

¹⁰ 桜井[1996: 207-252]を参照。

3. *dBang khrid nor bu sgron gsal* 和訳

本節では *dBang khrid nor bu sgron gsal* のうち、「般若智慧灌頂」と「語灌頂」について述べている部分の和訳を提示する。

般若智慧灌頂

それから、幸を備えた弟子のみ (*las ldan bu nyid*) に対して般若智慧灌頂を授ける。*Klong gsal nyi ma'i rgyud* に

意の障碍の浄化と能力の具備のために、そのマンダラの西方に、時は夜中の諸時刻において (*gung gi dus dag tu*)、第3〔灌頂〕の印母 (*gsum pa'i phyag rgya*)
〔すなわち、性的瑜伽のパートナー、としてふさわしい〕特徴を備えた女性を洗い清め、装飾品で飾りつけて据える。

とあるので、〔秘密灌頂を授けた〕その同じ金剛阿闍梨 (*rdo rje slob dpon de nyid*) が般若智慧灌頂を授けるのである。

弟子は黄金のマンダラを奉獻し、恭しく敬礼し、請願する。

おお、おお。

世尊、すなわち大樂である法界、瑜伽という金剛が不壊である主人 (*rnal 'byor rdo rje mi phyed bdag*)、真正な印の成就者 (*yang dag phyag rgya sgrub pa po*)、金剛の瑜伽から生じた者、大我である一切の主人 (*bdag nyid chen po kun dag nyid*)、君主 (*mnga' bdag*) に〔お願いいたしますので、〕その同じ〔金剛の瑜伽〕をお与えください (*de nyid stsol*)。

煩惱という輪廻の泥沼に沈んでいる、帰依処のない息子〔である私〕をお守りください。

と請願する。

それから〔ラマが弟子に〕三昧耶 (*dam tshig*) を与えるのは〔以下のような。〕

おお、秘密なる般若智慧の三昧耶 (*gsang ba shes rab ye shes kyi dam tshig*) という守るべきもの (*bsrung bya*) を心に保て (*sems la chongs*)。

女性 (bud med) を遠ざけず (mi spang)、受容すべきである (dang du blang)。梵行の実義 (tshangs spyod don) に住まうべきである。あらゆる徳性がここから生じる。

こ〔の三昧耶〕を遠ざけた者は樂の悉地がない (bde ba dngos grub med)。〔この三昧耶が〕破損した者はダーキニーの処罰 (mkha' 'gro'i chad pa) によって死亡し、諸地獄に堕ちる。

と3度唱える。

それから、弟子は次のように述べる。

死ぬかあるいは生命に危険が迫っても、大きな見返り (bya dga' chen po nyid) が生じるとしても、三昧耶という仏言 (bka') に違反しません。
ナラカン (na ra kan) ¹¹。

という風に〔三昧耶を〕受け入れて (khas blangs)、守るべきである。〔弟子は〕信頼を持って (mos pas)、礼拝と巡りを行なう (phyag dang bskor ba bya)。

それから、ラマは守護尊 (yi dam) を観想し、弟子たちに顔の覆い (gdong g.yogs) を縛り付ける。それから、〔ラマは弟子たちに〕智慧を降臨させる (ye shes dbab par bya)。〔ラマは〕以前のように立ち上がって、〔自らを金剛〕牝豚 (phag mo) 〔として〕観想する。ラマは〔金剛〕牝豚として輝いている〔自分自身〕の胸から〔多数の金剛〕牝豚を展開させて、弟子の心臓の真ん中に融解させ、言葉で次のように述べる。

金剛牝豚 (rDo rje phag mo) という善逝の母 (bde gshegs yum) が、芥子粒ほど〔の大きさで〕輝いて、樂に耐え切れずに乱舞し、毛穴すべてに満ちている。〔このようなありさまを〕繰り返し観想せよ、良家の息子よ。

と述べて〔弟子の〕顔の覆いを解いてやり、母尊 (yum) 〔すなわち印母〕の周りを巡り、礼拝し、花を奉獻する。〔ラマは〕母尊の虚空 (yum mkha') 〔すなわち女陰〕はあらゆる勝者の、秘密にして深遠な実義 (gsang ba zab mo'i don) である¹²という風に、聖典と合致して〔弟子に〕宣告し (lung dang mthun par ngo yang sprad)、

¹¹ 詳細不明であるが、呪術的定型句の1種であろうか。

¹² 女陰の教理的意味づけについては、安田[2009: 104, n. 29]も参照。

〔母尊の女陰を〕 恭しく敬礼し、花を撒く。

それから、母尊は次のように述べる。

フーム。

私の女陰 (bhaga) というこの偉大な秘密 (gsang chen) に対し、誰であれ信頼を持って (mos pas) 依拠する者は、あらゆる徳性と悉地が生じ、楽と空〔が不二一体の〕 最高の悉地 (bde stong mchog gi dngos grub) を獲得する。

オーム。グル、ダーキニー。

ハ、リ、ニ、サ、ラ、チャ、フリーヒ、ヤ¹³。

アンジャリ。ホー。

と母尊は述べる。

それから、金剛阿闍梨 (rdo rje slob dpon) は印母の左〔手〕の薬指を掴んで、幸を備えた弟子に次のように〔述べつつ〕委ねる。

フーム。

智慧の女神 (ye shes lha mo)、楽の身体 (bde ba'i sku)、全面的に安楽な場所を与える女 (kun tu bde ba gnas sbyin ma)、喜ばしく見目麗しく意に叶う女である、この〔印母〕を連れて行け ('di khyer)、勇猛な戦士よ (dpa' bo sems dpa' che)。〔彼女を〕常に恭しく供養せよ。

オーム。マハースカ。ホー。

と述べて、ラマは〔弟子の〕手に〔印母の左手の薬指を〕委ねる。

それから、〔ラマは〕この金剛句 (rdo rje'i tshig) を述べる。

おお、幸を備えた良家の息子よ。

汝自身をパドマヘールカ (Padmaheruka)、すなわち馬頭 (rTa mgrin, Hayagrīva) という力の身体 (dbang gi sku) として観想せよ。母尊は金剛牝豚として観想される。両者の蘊、界、処を戦士 (dpa' bo) とダーキニーとしてはっきりと思い浮かべ、自分〔の男根〕と母尊の秘密の虚空 (mkha' gsang) 〔すなわち女陰〕を、金剛杵と蓮華として加持せよ。母尊の蓮華に金剛杵をゆつくりと

¹³ この 8 音節の意味については、安田[2009: 105, n. 30]を参照。

〔挿入し〕拘束すべきである。接吻し、身心に樂を生起させ、樂〔の状態〕に心を捉え、ゆっくりと〔女陰の中で男根を〕かき混ぜるべきである (dal bus bsrub)。

菩提心〔つまり精液〕が失われると思ったならば (byang sems 'chor ba snyom byed na)、〔そうした思いを〕無分別な空で封印すべきである (mi rtog stong pa'i rgya yis gdab)。〔そのような思いが〕空に消え去った時 (stong par yal dus)、〔女陰の中で男根を〕かき混ぜることによって、繰り返し樂を燃え上がらせるべきである (yang yang bde ba sbar bar bya)。樂と空が不二であるその実義 (bde stong gnyis med don de) に対して、それとして〔実体的に〕把握せずに (der 'dzin ma byed)、対面する (ngo la stos)。二元性が喪失し、二元性が平等〔一体になった〕この時点において (gnyis shor gnyis mnyam dus 'di ru)、俱生の智慧 (lhan cig skyes pa'i ye shes) が出現する。それをしっかり捉えよ (ngo yis zin par gyis)。

という風に教誡を体験によって説く (man ngag nyams kyis bshad)。

幸を備えたその良家の息子が、ラマのお膝元 (drung) あるいは他所で、〔俱生の智慧を〕しっかり捉えない間は、〔ラマは繰り返し教誡を〕述べるべきである (gdab)。

〔弟子が俱生の智慧を〕捉えない間は、〔ラマは教誡の〕宣告 (ngo sprod) を繰り返すべきである。

以上によって、如何なる浄化対象 (dag bya) が浄化するのかというならば、煩惱という意の障碍 (yid kyi sgrib pa) が浄化され、意が有力なものになる。〔灌頂の〕後で最高級の (mchog can) 実際の性的パートナー (las kyi phyag rgya, karmamudrā) が親しんでよいもの (brten du rung ba) として許可される。幸福 (skal pa) は第 10 地〔の菩薩〕たちと等しい。果報は不生なる法身 (skye med chos sku) を得る。

秘密の般若智慧灌頂は万人に共通するものではないので、精神上の後継者 (thugs kyi sras) 〔のみ〕と出会いますように。封印、封印、封印。

語灌頂という宝石 (tshig dbang rin po che bzhugs pa lags so)

それから、定義を備えた弟子だけに第 4 灌頂を授ける仕方、それはまた Klong gsal rgyud に

身口意の 3 つにおける把握の障碍を浄化し (lus ngag yid gsum 'dzin sgrib dag)、

〔それら〕3者の能力を極みに至らしめるために (gsum pa'i nus pa tshad phyin phyir)、マンダラの北方において、暁の日の出の時 (tho rangs rtse shar dus)、幸を備えた弟子に授けるべきである。

とあるので、暁の日の出の時、阿闍梨父母尊 (slob dpon yab yum) [つまりラマと印母] は皆立ち上がって、身の清めをし (khrus byas)、装飾品を身に付け (rgyan btags)、意欲を起こす (spro ba bskyed)。〔弟子は〕黄金のマンダラと花を捧げ、マンダラの北に座って、合掌し礼拝し、〔次のように〕請願する (gsol ba gdab)。

おお、おお、三世のラマ尊 (dus gsum bla ma rje) よ。

真正なる智慧の本質 (yang dag ye shes ngo bo nyid)、すなわち叡智¹⁴の本質である智慧 (rig pa'i ngo bo ye shes) に対して、私は確定的な知 (nges pa'i shes pa) を起します。すなわち、この最高の不二の智慧 (gnyis med ye shes mchog 'di nyid) は他の衆生には存在しません。この正法という最高の甘露を飲まんがために、私はラマに対して、尊敬の意を以って請願します (gus pa'i yid kyis gsol ba 'debs)。もし勝義を私がお願いしたならば (gal te don dam bdag gis 'tshal)、あらゆる点で最高の (rnam pa kun tu mchog gyur ba'i) 4番目の灌頂を私にお授け下さい。吉祥なるラマはご恩をお与えください (bka' drin stsol)。

と言って請願すべきである。

それから、マンダラを酒で濡らし (maṇḍal chang gis brian)、守護尊を観想し花を配置し、勇者父母尊の群れ (tshom bu dpa' bo yab yum) を生起させ、加持し、智慧〔薩埵〕を引き寄せ、入り込ませる。髑髏杯を甘露としての酒で満たし (thod pa bdud rtsi chang gis dgang)、マンジ (manydзи) ¹⁵あるいは小椅子 (khri'u) の上に置く。酒を塗った鏡 (me long chang gis byugs pa) の上に、黄丹 (sindhura) を砕いて、法源 (chos 'byung) と父母尊の根本真言 (yab yum rtsa sngags) を書く。〔その〕周辺には持明者の名前も書く。外、内、秘密の供物の集合 (phyi nang gsang ba'i mchod tshogs) を極めて沢山、美しく並べる。ケーキ (gtor ma) も美しく並べる。また、第3〔灌頂〕の印母である定義を備えた女 (gsum pa'i phyag rgya mtshan ldan ma) を見事に装飾品で飾り立てて据える (legs par rgyan gyis brgyan la bzhaḡ)。

¹⁴ 「叡智」(rig pa) という語がニンマ派において持つ特殊な意味については、安田[2008: 64, n. 15]を参照。

¹⁵ 詳細不明につき、現在調査中である。

それから、ラマと守護尊を生起させ (bla ma yi dam bskyed)、髑髏杯の甘露を加
持し、群れの父母尊 (tshom bu'i yab yum) を供養し讃嘆する (mchod cing bstod)。

〔それら群れの父母尊は〕光に融解し、根本の文字〔すなわち種子〕となる ('od zhu
rtsa ba'i yi ger gyur)。文字は自分の胸に集まり (bdag gi thugs kar 'dus)、胸から 5 つ
の光線が広がって、5 人の供養女神 (mchod pa'i lha mo lnga) になり、虚空の果てと
等しく変幻して (nam mkha'i mtha' dang mnyam par sprul)、鏡の〔上に根本真言を書
いた〕尊格に供養を捧げ (me long lha la mchod pa dbul)、実際の甘露 (dngos 'byor bdud
rtsi) によって供養し、讃嘆する。父母尊の群れは等入〔すなわち交合〕し (snyoms
par zhugs)、〔その交合の結果としての〕菩提心が髑髏杯の甘露として落下し (byang
sems thod pa'i bdud rtsir babs)、甘露によってラマと守護尊を供養する。供物の集合
を捧げ (tshogs 'bul)、楽器の音を鳴らし、伝統〔に属するラマ〕たちに請願をする
(brgyud pa rnams la gsol ba gdab)。

それから、ラマは弟子に〔次のような〕諸々の三昧耶を授与する (dam tshig dag ni
dbog bya ste)。

オーム、アーハ、フーム、フリーヒ、マ。

守られ得ない三昧耶 (bsrung du med pa'i dam tshig) とは、万物が味を等しく
する存在自体の次元 (thams cad ro snyoms chos nyid ngang)、すなわち、輪廻
と涅槃や取捨を離れたところの ('khor 'das spang blang bral ba yi)、およそ出
現するものが存在自体の遊戯である (gang shar chos nyid rol pa) 〔次元〕にお
いて、無明の把握作用によって汚されない〔状態〕を守るべきである (ma rig
'dzin pas ma bslad bsrung)。

逸脱すれば、輪廻に戻ってしまう ('das na 'khor bar ldog go)。

ナラカン (na ra kan)。

弟子は〔以上の〕三昧耶を受け入れる (dam tshig khas ni blangs)。

それから〔ラマは弟子に〕智慧を降臨させる (ye shes dbab par bya)。すなわち、
弟子は大日〔如来〕の 7 〔つの座〕法を組み (rnam snang chos bdun bca')、眉間の赤
色の卍 (smin phrag g.yung drung dmar po gcig) が左へと速く回転している (g.yon du
myur du 'khor ba) 〔のを思い浮かべるが、その卍〕に対して、気を散らさずに〔ラ
マは弟子の認識を〕差し向けさせて (ma yengs gtod du gzbug byas la)、大いなる加

持によって智慧を降臨させる (byin rlabs chen pos ye shes dbab)。それによって智慧¹⁶が降臨したならば、[弟子は] その状態でリラックスする (klod pa)。すなわち、[ラマは] 「はからいなく、リラックスせよ」 (bcas bcos med par klod cig) と語り、[弟子は] その状態にしばらく落ち着く (de yi ngang la dar cig bzhas)。すると、生き生きとした楽・明・無分別〔の状態〕において (bde gsal mi rtog so ma la)、ゆったりした ('bol le)・力みのない (shig ge)・ひっそりとした (lhan ne ba)・雲のない空の如き〔状態〕が生じる (sprin bral nam mkha' lta bu 'byung)。こ〔の状態〕がありのままの実相 (gshis kyi gnas lugs) であるから、[ラマは] 「それが法身である」と [弟子に] 宣告する (de ni chos skur ngo yang sprad)。

それから、ラマの前で弟子は立ち上がって合掌する。それから、ラマは次のように語る。

おお、おお、良家の息子よ。視線の先端を東の虚空に向けよ (mig rtse nam mkha' shar du ltos)。

[弟子は] 東の中空へと (shar gyi bar snang dag la)、遮りなく進み行くのを観想する (thogs pa med par 'gro bar bsgoms)。南、西、北の方角〔についても〕それによって類推する (lho nub byang phyogs des 'gre'o)。進み行くのを思い浮かべる時、進み行く人は存在しない ('gro bar bsam na 'gro mkhan med) し、進み行く場所に到達することはない (gang du 'gro sar phyin pa med)。進み行くのを思い浮かべるのは自分の心である ('gro bar bsam pa rang gi sems) が、[その] 心は〔有と無の〕極端を離れ、空である (sems ni mtha' bral stong pa yin)。

それから、ラマは次のように語る。

おお、良家の息子よ。

汝の心は最初、何から生じたのか (khyod kyi sems ni dang po gang nas byung)、如何なる因と縁から生じたのか (rgyu rkyen ci las byung)。

と尋ねる。そして、[弟子が] 「生じて来たところは存在しない」と認識したならば ('byung sa med shes na)、[ラマは] それこそが実義であると [弟子に] 宣告する (de nyid don du ngo yang sprad)。

¹⁶ この「智慧」が具体的にどのような内容を持っているのかははっきりしない。

それから、ラマは次のように語る。

おお、良家の息子よ。

汝は勝者のこの尊像 (rgyal ba'i sku gzugs 'di) を見よ。〔これは〕 沢山の装飾品と衣装として現われている (rgyan dang cha lugs du mar snang)。現われとして把握するのは自分の心である (snang bar 'dzin pa rang gi sems) が、そ〔の自分の心〕を見よ (de la ltos dang)。〔それは〕 基盤と根本を欠いている (gzhi rtsa bral)。同様に、意の対象〔として〕顕現する色形は (yid yul snang ba'i gzugs)、対象そのものは輝いているが (yul nyid gsal la)、〔その把握〕 者は空である (mkhan po stong)。その〔ようなありよう〕が、輝きつつ空である法身である (de ni gsal stong chos sku yin)。

それから、ラマは〔おおよそ〕 次のように語る ('di skad brjod)。すなわち、〔ラマは〕 小太鼓 (cang te'u, damaru)、鈴、銅鑼 ('khar nga)、あるいは爪弾き (se gol)、小型の鈴 (g.yer kha) の音を響かせ、その音が聞こえるか聞こえないか (snyan mi snyan)、音があるのかないのか (sgra 'dug mi 'dug) を〔弟子に〕 考察させる (brtag tu gzhus)。そ〔の音の〕 本質が得られなければ (de yi ngo bo ma rnyed na)、それは「響く空」と呼ばれる (de ni grag stong bya ba yin)。響くもの、つまり音となるものの一切合切 (grags pa sgra ru gyur tshad kun) は明らかに響くけれども (gsal bar grags kyang)、本質は空であり (rang bzhin stong)、悪いもの・良いもの〔として〕 立ち現われた時 (skyon yon shar dus) 〔でも〕、基盤が存在せず、根本を欠いているのである (gzhi med rtsa bral yin)。

それから、ラマは〔おおよそ〕 次のように語る。「おお、良家の息子よ。汝は〔という言葉から始めて〕、香 (spos) や薬 (sman) などの芳香 (dri zhim) と、好ましくない匂い (mi sdug dri ma) を嗅がせ、その香りの内実 (de yi dri don) を考察させる (brtag tu gzhus)。そ〔の匂い〕に愛憎 (chags sdang) が生じたならば、その〔愛憎を抱く〕者 (mkhan po) 〔である心〕を根絶すべきである (rtsad kyang bya)。それによって、縁としての顕現と知識を混ぜ合わせる (rkyen snang shes pa 'dres)。二元的把握の知識は一時的なものである (gnyis 'dzin shes pa glo bur yin)。縁は外部に顕現するけれども (rkyen phyir snang yang)、本質は空である (ngo bo stong)。

それから、ラマは次のように語る。

おお、良家の息子よ。

汝は最高の味の飲食物 (bza' btung ro mchog) を味わえ。甘さ、酸っぱさ、しょっぱさ、辛さ、苦さ、渋さという 6 つの味を味わう者 (ro drug myong ba'i mkhan po) を見よ (ltos)。見て得られないものは不生であり (bltas pas mi rnyed skye ba med)、極端を離れた中観 (mtha' bral dbu ma)、戲論を離れた次元 (spros bral ngang)、自発的に解脱した法身 (rang grol chos sku) であると知るがよい。

それから、ラマは次のように語る。

おお、良家の息子よ。

汝はこの身体を素っ裸にせよ (lus 'di gcer bur phyung gyis)。そして柔らかい、或いはざらざらした感触のいずれかに身を寄せるべきである (reg bya 'jam rtsub gang yang brten)。その[感触]に愛憎があるか (de la chags sdang 'dug gam)。

と尋ねる。そ〔の感触〕に如何なる二元的把握が生じても (gnyis 'dzin gang skyes kyang)、形象は輝いているが本質は空であり (rnam pa gsal la rang bzhin stong)、自分の心であると宣告する (rang gi sems su ngo yang sprad)。

それから、ラマは次のように語る。

おお、良家の息子よ。

汝は、喜びと痛み、あらゆる苦を観想せよ (skyid sdug sdug bsngal mtha' dag sgoms)。それを喜ぶか、喜ばないか (de la dga' dang mi dga')。

と尋ねる。〔この時、生じる感情が〕 どのようであろうとも、〔それは〕 心より生じたのである (gang ltar 'dug kyang sems las byung)。楽と苦のどちらが出てきても、〔それらは〕 輝いてはいるが、本質としては知識と空〔が不二一体なもの〕である (gsal la ngo bo rig stong yin)。たとえば水月のようなのである。〔ラマは弟子に〕 それら〔苦楽〕などや五毒や三毒をも (de sogs dug lnga dug gsum yang)、きっかけによって生起させて (rkyen gyis skyer gzhus)、〔その本当のありさまを以下のように〕 宣告する (ngo yang sprad)。すなわち、心の本質は空であるが (sams kyi ngo bo stong pa la)、空の輝く局面が概念構想として迷乱するのである (stong pa'i gsal cha rtog par 'khrul)。聖典¹⁷ (lung) には「心に想起や思いが立ち現われるので (sams la dran bsam 'char ba'i

¹⁷ いずれの文献を指しているのか、現在調査中である。

phyir)、本質も概念構想によって汚される (ngo bo nyid kyang rtog pas sbag)」と出ている。煩惱の罪過を悟ったならば (nyon mongs pa yi mtshang rtogs na)、対治や取捨なしに解脱する (gnyen po spang blang med par grol)。

〔ラマは〕 以上のように宣告を広大に述べる (ngo sprod rgyas par gdab)。

以上〔の第4灌頂〕によって、如何なる浄化対象 (dag bya) が浄化されるのかというならば、身口意の3者における把握作用という障碍が浄化され (lus ngag yid gsum 'dzin sgrib dag)、3者の能力が極みに達する (gsum ka'i nus pa tshad du phyin)。身を寄せるべき対象としての楽と苦、取捨を離れる (brten bya bde sdug spang blang bral)。〔儀式的〕後で不可分性の修習が許可される (rjes su dbyer med bsgom par gnang)。地 (sa) は第11〔地〕の普光 (bcu gcig kun tu 'od) である。〔息災、増益、敬愛、降伏という〕4つの事業〔全部〕が目目の当たりになる (phrin las bzhi po mngon du gyur)。果報〔については〕自ずと成立した5仏身¹⁸を獲得する ('bras bu sku lnga lhun grub thob)。

語灌頂の宣告という宝鬘 (tshig dbang ngo sprod rin chen phreng) は万人に共通するものではない (kun gyi thun mong ma yin pa)。〔本書が〕精神上の後継者 (thugs kyi sras) 〔のみ〕と出会いますように。封印、封印、封印。

4. *dBang khrid nor bu sgron gsal* チベット語テキスト

以下に示すのは *dBang khrid nor bu sgron gsal* のうち、「般若智慧灌頂」の部分のチベット語テキストである。「語灌頂」の部分のテキストについては、紙数の都合により今回の掲載を見送り、別稿を期することにする。「般若智慧灌頂」、「語灌頂」のテキストの所在はそれぞれ、*sNying thig ya bzhi*(NyThYZh), 13 vols., Delhi: Sherab Gyaltzen Lama, 1975, vol. 10, 178.3-182.4 および 182.4-189.2 である。なお、異本の存在は現在のところ確認できていない。

shes rab ye shes kyi dbang bzhugs (178.4) so ཨོཾ ཨོཾ

de nas las ldan bu nyid la ཨོཾ shes rab ye shes dbang bskur ba ཨོཾ

Klong gsal nyi ma'i rgyud dag las ཨོཾ

yid sgrib dag dang nus ldan phyir ཨོཾ (178.5) dkyil 'khor de yi nub phyogs su ཨོཾ

¹⁸ 具体的にどのような仏身群を指しているのか不明である。

dus ni gung gi dus dag tu ག ག གsum pa'i phyag rgya mtshan ldan ma ག
khrus byas rgyan gyis spras la bzhag ག

ces pas ག

rdo (178.6) rje slob dpon de nyid kyis ག shes rab ye shes dbang bskur te ག slob mas gser gyi
maṇḍal dbul ག gus pas phyag 'tshal gsol ba gdab ག

kye kye

bcom (179.1) ldan bde chen chos kyi dbyings ག rnal 'byor rdo rje mi phyed bdag ག
yang dag phyag rgya sgrub pa po ག rdo rje rnal 'byor las ni byung ག
bdag nyid chen po (179.2) kun bdag nyid ག mnga' bdag la ni de nyid stsol ག
nyon mongs 'khor ba'i 'dam du ni ག bying ba'i skyabs med bu la skyobs ག

zhes ni gsol ba gdab par (179.3) bya ག
de nas dam tshig sbyin pa ni ག

kye ma gsang ba shes rab ye shes kyi ག dam tshig bsrung bya sems la chongs ག
bud med mi spangs dang du blang ག tshangs spyod don la (179.4) gnas par bya ག
yon tan thams cad 'di las 'byung ག 'di spangs bde ba dngos grub med ག
nyams pa mkha' 'gro'i chad pa yis ག tshe 'phos dmyal ba dag tu (179.5) ltung ག

zhes ni lan gsum brjod pa yin ག
de nas slob mas 'di skad brjod ག

shi'am srog la bab gyur kyang ག bya dga' chen po nyid byung yang ག
dam tshig bka' (179.6) las 'da' mi byed ག na ra kan

zhes khas blangs bsrung ག mos pas phyag dang bskor ba bya ག
de nas bla ma yi dam bsgom ག slob ma dag la gdong g.yogs (180.1) bcings ག de nas ye shes
dbab par bya ག sngar bzhin langs te phag mo bsgom ག bla mas phag mor gsal ba yi ག thugs
las phag mo spros byas la ག slob ma'i (180.2) snying gi dkyil du bstim ག tshig tu 'di
skad brjod par bya ག

rDo rje phag mo bde gshegs yum ཨོ རྟུ་མཚུག་ཏུ་གསལ་བ་ལ་ཨོ
bde bas mi bzod gar byed pa ཨོ བ་ (180.3) spu'i bu ga kun tu gang ཨོ
yang yang sgoms shig rigs kyi bu ཨོ

zhes brjod gdongs g.yogs bkrol byas la ཨོ yum la bskor phyag me tog dbul ཨོ yum mkha'
(180.4) rgyal ba thams cad kyi ཨོ gsang ba zab mo'i don yin par ཨོ lung dang mthun par ngo
yang sprad ཨོ gus pas phyag 'tshal me tog gtor ཨོ
de nas yum gyis 'di skad (180.5) brjod ཨོ

hūṃ
nga yi bha ga gsang chen 'di ཨོ gang zhig mos pas sus brten pa ཨོ
yon tan dngos grub thams cad 'byung ཨོ bde stong mchog gi dngos grub thob ཨོ
om (180.6) guru ḍākkini ha ri ni sa ra tsa hrīḥ ya andzali ho ཨོ

zhes ni yum gyis brjod par bya ཨོ
de nas rdo rje slob dpon gyis ཨོ phyag rgya'i srin lag g.yon bzung nas ཨོ las ldan (181.1) bu
la 'di skad gtad ཨོ

hūṃ
ye shes lha mo bde ba'i sku ཨོ kun tu bde ba gnas sbyin ma ཨོ
dga' ba gzugs mdzes yid 'ong ma ཨོ 'di khyer dpa' bo (181.2) sems dpa' che ཨོ
rtag tu gus pas mchod par gyis ཨོ
om mahāsuka ho ཨོ

zhes brjod bla mas lag tu gtad ཨོ
de nas rdo rje'i tshig 'di brjod ཨོ

kye ma las ldan (181.3) rigs kyi bu ཨོ khyod nyid Padma heruka ཨོ
rTa mgrin dbang gi sku ru sgoms ཨོ yum ni rDo rje phag mor bsgoms ཨོ
gnyis ka'i phung khams skye mched rnams ཨོ dpa' bo (181.4) mkha' 'gro gsal btab
nas ཨོ
bdag dang yum gyi mkha' gsang ni ཨོ rdo rje padmar byin gyis rlobs ཨོ
yum gyi padmar rdo rje dal gyis bcing ཨོ 'o bya lus (181.5) sems bde ba bskyed ཨོ

bde la sems bzung dal bus bsrub ངོ byang sems 'chor ba snyom byed na ངོ
 mi rtog stong pa'i rgya yis gdab ངོ stong par yal dus (181.6) bsrub pa yis ངོ
 yang yang bde ba sbar bar bya ངོ bde stong gnyis med don de la ངོ
 der 'dzin ma byed ngo la stos ངོ gnyis shor gnyis mnyam dus 'di ru ངོ
 (182.1) lhan cig skyes pa'i ye shes 'char ངོ de ni ngo yis zin par gyis ངོ

zhes ni man ngag nyams kyis bshad ངོ
 las can rigs kyi bu des kyang ངོ bla ma'i drung ngam gzhan (182.2) dag tu ངོ ngos ma zin gyi
 bar du gdab ངོ ma zin bar du ngo sprod bskyar ངོ
 des ni dag bya gang dag na ངོ nyon mongs yid kyi sgrib pa dag ངོ yid ni mthu dang ldan par
 (182.3) 'gyur ངོ rjes su mchog can las kyi ni ངོ phyag rgya brten du rung bar gnang ངོ skal pa
 sa bcu dag dang mnyam ངོ 'bras bu skye med chos sku 'thob ངོ
 gsang ba (182.4) shes rab ye shes dbang ངོ kun gyi thun mong ma yin pas ངོ thugs kyi sras
 dang 'phrad par shog ངོ rgya rgya rgya ངོ

参考文献一覧

1 次文献および略号

- KhGNyTh: *mKha' 'gro snying thig*, in NyThYZh, vols. 10-11.
 KhGYT: *mKha' 'gro yang tig* by Klong chen rab 'byams pa, in NyThYZh, vols. 7-9.
 NyThYZh : *sNying thig ya bzhi*, 13 vols., Delhi: Sherab Gyaltzen Lama, 1975.
, in KhGNyTh, part 1, 173.2-189.2.

2 次文献

北村太道

- 1988 「チベット密教の灌頂儀式—ゲルク派におけるヤマーンタカの灌頂—」、『成田山仏教研究所紀要』11、pp. 179-200.
 1991 「チベット密教における灌頂儀式」、『密教学研究』23、pp. 1-20.
 1992 「チベット密教の灌頂儀式—ゲルク派における Guhyasamāja の灌頂—」、『仏教文化史論集』Ⅱ、pp. 129-162.
 1993 「チベットの灌頂儀式—Cakra-saṃvara の灌頂—」、『インド学密教学研究 下一宮坂宥勝博士古稀記念論文集—』、京都：法蔵館、pp. 1049-1091.

桜井宗信

- 1996 『インド密教儀礼研究』、京都：法蔵館。

田中公明

- 2006 「『サマーヨーガ・タントラ』—般若・母タントラの原形—」、『インド後期密教〔下〕 般若・母タントラ系の密教』（松長有慶編著）、東京：春秋社、pp. 13-46.

津田真一

- 1987 『反密教学』、東京：リプロポート、
ツルティムケサン

- 1994 『インド密教思想史』、京都：西藏仏教文化協会.

森雅秀

- 1999 「灌頂儀礼」、『シリーズ密教 1 インド密教』（立川武蔵・頼富本宏編）、東京：春秋社、pp. 194-208.

安田章紀

- 2007 「チベットにおける五智思想の展開—ロンチェンパの五智思想—」、『仏教史学研究』 50-1, pp. 1-24.

- 2008 「『カンドニンテイク』研究(1)—*Bras bu yongs rdzogs btags grol snying po'i rgyud dri med snying po* 和訳—」、*Acta Tibetica et Buddhica* 1、Minobu: Faculty of Buddhism, Minobusan University、pp. 59-81.

- 2009 「『カンドニンテイク』研究(2)—*dBang khrid nor bu sgron gsal* 和訳—」、*Acta Tibetica et Buddhica* 2、Minobu: Faculty of Buddhism, Minobusan University、pp. 95-116.

- 2009a 「ロンチェンパにおける9乗の思想」、『印度学仏教学研究』58-1、pp. 489-492.

Achard, Jean-Luc

- 2002 "La liste des tantras du *rNying ma'i rgyud 'bum* selon l'edition etablie par Kun mkhyen 'Jigs med gling pa", *Revue d'Etudes Tibétaines* 1, pp. 62-89.

京都大学大学院修了

Ex-Graduate Student

Graduate School of Letters,

Kyoto University

Kyoto, Japan